

十戒、第三戒

出エジプト20章7節

「あなたは、あなたの神、主の名をみだりに口にすることはならない。主は、主の名をみだりに口にする者を罰せずにはおかない。」

この第三戒を学ぶ前に確認します。誤解して欲しくないのは、この第三戒は決して熱心に祈っておられる方に対して、それを否定しているという事ではありません。祈りには、その人、その人の形があります。それは大切にして頂きたいと思えます。ある集会で、ある牧師曰く。「祈る時は、イエス様の名をたくさん呼びなさい。「イエス様、ああイエス様」と、いう様に。でもみんな祈る形は違います。それでいいのです。

では、この所で神様は何を教えようとしておられるのでしょうか。さて・・・

- ・「第一戒」は、「聖なる神、義なる神を礼拝しなければならぬ」と学びました。
- ・「第二戒」では、「聖で義なる神を、正しい方法で礼拝しなければならぬ」と学びました。
- ・「第三戒」は「聖で義なる神のみ名を、ことばで汚してはならぬ」と学びます。

さて、私たちは祈る時に、まず神様の名前を出します。「天のお父様、天の父よ、神様、主

よ、・・・」名前を言わないで、祈り出す人は、まずいないでしょう。でも、その神様の名を口に出す時は、まず神様の名を正しく理解していなければなりません。更に、その祈る目的は正しいものでなくてはなりません。そうでないと、神様の名を汚してしまいます。

イザヤ48:1節は第三戒を破る最悪の形です。「これを聞け、ヤコブの家よ。あなたはイスラエルの名で呼ばれ、・・・イスラエルの神を呼び求めるが、真実をもってせず、また正義をもってしない。」

人間の世界でも、相手に話しかけてもカラ返事、何かを約束しても、守らない、実行してくれない、その様な人、確かに人格を疑ってしまいますね。そんなことをされたら、非常に腹が立ちます。辛いです。顔に泥を塗られたような感じです。でも皆さん、あなたは神様の顔に泥を塗っているようなことをしていないでしょうか？

ある信者は神様を、まるで自分のお手伝いさん、メイドさん、女中さん、使用人のようにしています。でも本人は気づいていないのです。

———— 御名に対する私たち

の態度 ———

さて、出エジプト20章3節の直訳は次の通りです。「主は、みだりに御名を唱える者を、きよいとは認めないであろう。」

クリスチャンその人の道徳的な清潔の尺度は、神様の名に対する態度です。人は神様の名を真実に唱えるか、あるいはみだりに唱えるかによって、その人は聖くもなり、汚れた者ともなります。イエス様も、主の祈りの中で、次の様に教えられました。

(マタイ6:9節)「天にいます私たちの父よ。御名が聖なるものとされますように。・・・」

———— 御名を汚す

者 ———

さて、私たちはいつも、この聖い神様の御名を汚さないように、神様と交わっているのでしょうか？ 神様に心から尊敬を込めて呼びかけているのでしょうか？

今日（こんにち）多くの人々は、次の3つの方法で、この第三戒を破っています。

それは ①不敬虔 ②不真面目 ③偽善 です。

———— ① 不敬虔

————
不敬虔、汚れた心、きたない言葉の、ののしり合いが、ある時ふっと、町の中から聞こえて来ます。その所の空気も汚れてしまっているように感じました。それにしても私たちの、普段何気なく使っている言葉が人を傷つけているかも知れません。ある方が次の様に言いました。「罪はまごころの不足ばかりでなく、思慮の足りなさからも犯されるのです。」

クリスチャンでも、神様の前で、汚い、雑なことばを平気で使う人がいます。また、ののしりの言葉を使いながら、全く自覚のない人もいます。きつと、この様な人は、道徳的に腐敗した雰囲気の中で生まれ育ったからなのかも知れません。神の名をもって、人を呪うような軽薄で、不信仰な行為に陥ってはなりません。

外国人の中には、実に軽々しく神の名を使う人が多いと聞きます。日本人が「まぬけ、とろい」というところを「ジーザス・クライスト」とか言います。「とんでもない、こんなものは犬にでもくわれてしまえ」と言うのを「オー・マイ・ゴッド」と言った

りして使います。この様なことばを平気で使う人は、元々考えなしの人なのかも知れませんね。

総督ペリクスから学びましょう。

(使徒24:24～27節) 「フェリクスは・・・パウロを呼び出し、キリスト・イエスに対する信仰について話を聞いた。しかし、パウロが正義と節制と来るべきさばきについて論じたので、フェリクスは恐ろしくなり、『今は帰ってよい。折を見て、また呼ぶことにする』と言った。また同時に、フェリクスにはパウロから金をもらいたい下心があったので、何度もパウロを呼び出して語りあった。・・・」 フェリクスは神様を求めていたのではなく、金を得たいために、神を利用することだけに熱心であったのです。

——— ② 不真面目

神様に対して考えなしの態度をとる人々は、神様を冗談で吹き飛ばしてしまう様な口の聞き方もします。神聖な御名を軽率で不まじめに用いることや、神様について広く使われている冗談をいとも軽く口にします。ブラック・ユーモアで人を面白がらせるような方法で、神様の御名を用いる様々な事が話されます。この様な人々は

- ・神様をだしにして、ジョークを言います。
- ・神様を引っ張り出して、人を笑わせます。「アーメン・ソーメン」「おー神様」
- ・神様をねたにして笑い、楽しんでいます。神の名を汚し、冒とくしています。

伝道をする時に、最も困るのは、相手が不まじめの時です。アテネの人々の様な人々を相手にする時です。(使徒17:21、32、33節) 「・・・アテネ人も、そこに滞在する他国人もみな、何か新しいことを話したり聞いたりすることだけで、日を過ごしてい

た。・・・死者の復活のことを聞くと、ある人たちはあざ笑ったが、ほかの人たちは『そのことについては、もう一度聞くことにしよう』と言った。こうして、パウロは彼らの中から出て行った。」

ここから教えられることは、相手が不真面目な時は、パウロの様に伝道はやめるべきです。

イエス様も言われました。（マタイ7:6節）「聖なるものを犬に与えてはいけません。真珠を豚の前に投げてはいけません。犬や豚はそれらを足で踏みつけ、向き直って、あなたがたをかみ裂くことになります。」

ヘロデ大王からも学びましょう。

（ルカ23:8、9節）「ヘロデはイエスを見ると、非常に喜んだ。イエスの事を聞いていて、ずっと前から会いたいと思い、またイエスが行うしるしを何か見たいと望んでいたからである。それで、いろいろと質問したが、イエスは何もお答えにならなかった。」

ヘロデにとってイエス様の奇跡は、一つの見世物でした。サーカス、奇術、手品、を見るのと同じでした。この様な不真面目な人は、イエス様から何も教えられない人、いただけない人なのです

———— ③ 偽善

偽善とは、神様（聖霊）を欺く罪です。神の名を使って嘘をつくのです。この第三戒を破るという恐ろしいことは、実生活が信仰告白と一致しないのに、神の名前を絶えず使っていることです。口では神の名を唱えながら、心では、行いでは神を否定しているのです。これこそが神の名をみだりに唱えることではないでしょうか。

アナニアとサツピラ夫婦の罪からも学びましょう。

(使徒5:1～11節、読む) アナニアと妻サツピラは、二人で結託して神の前で罪を犯しました。そして、二人とも裁かれました。残念ですね。彼らは、土地を売って教会に献金をしたのに、良いことをしたのに裁かれました。なぜでしょうか？ 原因は、バルナバと張り合ったからです。バルナバが自分の所の畑を売って神様に献げたのを聞いて、賞賛を得ようとして、土地の一部を「全部献げた」と報告したからです。一部でも神様は喜ばれたはずです。ありのまま報告したらよかったです。神様に嘘を言うてはいけません。それは偽善です。

罪人には、2種類あります。

第1、罪人であることを認めている罪人。

第2、罪人であることを認めない罪人です。すなわち、偽善者です。

イエス様は、いつも第1の人々の友でした。どんなにみにくい罪を犯した人でも、恥ずかしい失敗をして人生につまずいた人でも、イエス様は受け入れられます。罪を悲しみ、罪を悔いて祈っている人々の祈りに耳を傾けられます。そしてその人の友となります。

ところが、イエス様は偽善者に向かっては厳しい態度をとられました。

罪人には救いがあります。しかし、偽善者には救いはありません。

「主よ、主よ」と百万回繰り返しても、神様の顔に泥を塗るような生活、心と口先とがちぐはぐな生活、その様な偽善こそ、神様が最も嫌われることなのです。ですから、

「主は、主の名をみだりに口にする者を罰せずにはおかない」のです。

今、すでに罪許されている私たちは、全天全地の主なる神様を、私たちの天のお父様と呼ぶことができます。素晴らしいことです。これからも、続けて、自らを偽らない生き方をしましょう。

(第一コリント4:4節) 「私には、やましいことは少しもありませんが、だからといって、それで義と認められているわけではありません。私をさばく方は主です。」

私たちも、不敬罪、不真面目の罪、偽善に気をつけましょう。

最後に、一人の青年の話をしてしましょう。

その青年が夢を見ました。彼は夢の中で医者から死を宣告されました。「あなたの生命は今日までです。」彼は、以前信じていたはずの救い主でしたが、今はすっかり忘れてしまっていました。「救われなければ・・・、救い主がおられたはずだ、その方からの手紙も受け取っている、でも何が書いてあったか思い出せない。はやく、探さなければ・・・」しかし、見つかりません。そんな時、死の使いが、部屋の戸をノックする音を聞きました。「助けてください。主よ、主よ！」滅茶苦茶に叫びました。その時、目を覚ましました。

全身、汗びっしょりです。ふといつもの本棚に目を向けますとありました。聖書がありました。彼は聖書をつかむと、しっかりと握りしめました。祈るように、一番汚れていたページを開きました。

(第一ヨハネ5:5、12、13節) 「世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。・・・御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。」

ん。・・・神の御子を信じているあなたがたに、これらのことを書いたのは、永遠のいのちを持っていることを、あなたがたに分からせるためです。」

彼は、もう一度、自分が救われていることを確信したのでした。

私たちも、みことばにより救われていることを確信しましょう。焦る必要はありません。神様にこっちに向いてもらおうとして「主よ、主よ」と大声で叫ぶ必要もありません。主の愛と約束を信じていたら良いのです。